愛国学園大学人間文化研究紀要　第18号　43～60頁　2016年３月

〔論文〕

『西東詩集』：「愛の巻」について

鈴　木　邦　武

「愛の巻」（USCHK NAMEH BUCH DER LIEBE）は『西東詩集』の3番目に収められている。タイトルが示すようにこの巻は女性への愛をテーマとしたものであるが、1815年10月6日にこの詩集を分類したとき、ゲーテは愛をテーマとした詩を二つの巻に分類し、<Suleikaname Das Buch Suleika. Ⅰ>と<Suleikaname.Das Buch Suleika. Ⅱ>としていた。しかし、その後前者は<Buch der Liebe>と改められ、後者が<Buch Suleika>としてこの詩集に収められることになった。

「ズライカの巻<Buch Suleika>」が65歳の老詩人と30歳の人妻マリアンネ・フォン・ヴィレマー（Marianne von Willemer, 1784－1860）との恋が、ゲーテ自身をハーテムとマリアンネをズライカと名づけて、二人だけの愛の仮面のもとで演じられているのを歌い上げているのに対して、こちらの「愛の巻」の方は様々な男女の愛の形を歌っている。

なお、1819年の初版でのペルシア語のタイトル<Usch Nameh>を1827年から1830年にかけて作成された決定版で<Uschk Nameh>と改めたのは、[uschq]と発音される原語に近かづけるためだったのであろう。

冒頭の「前のことば」は初版本には掲げられてはいなかった。決定版の際に追加されたものである。

「前のことば」
わたしの心が求めていることを
言って下さい
わたしの心はあなたのもとにあります
それを大切にして下さい

(Sage mir
Was mein Herz begehrt?
Mein Herz ist bey dir
Halt es werth.)[1)]

この詩句はハマー＝プルクシュタル訳の『ハーフィズ詩集』中の次の句に基づくものとされている。

御覧下さい！わたしの心は戸口にあります
どうかそれを大切にして下さい

(Sieh! Mein Herz steht vor der Thüre
Halt' es doch in Preis und Ehren)[2)]

「愛の巻」の最初の詩は「模範」と題されている。「ヴィースバーデン目次表」では28番目に掲げられておりこの目次表が1815年5月30日に成立しているので、それ以前に作られていたと考えられる。ここでは「恋人たち（Liebende）」と題されている。『1817年の婦人のための小冊子（Tashcenbuch für Damen auf das Jahr 1817）』では「愛の模範（Liebesmuster）」というタイトルになっていた。

模範

6組の恋人たちのことに
耳を傾け、心に留めておきたまえ
言葉でのイメージが燃え上がらせ、愛が煽り立てる
ルスタンとロダウ
知らない同士で近づきあう
ユースフとズライカ
愛が愛の成果を生み出さない
フェルハードとシーリーン
互いのためにのみ存在する
メジュヌーンとライラー
年老いても愛情を込めて
ジェミールはボタイナーを見た
甘い恋の気まぐれ
ソロモンと褐色の女
これらの恋人たちを良く心に留めておけば
君は恋の中でくじけることはない[3)]

ルスタンとロダウについて、ルスタン[4)]はサーサーン朝（226－651）の頃からイラン民衆の間に広く伝えられていた伝説的英雄で、ロダウ[5)]は彼の母親。ロダウと愛し合うのはルスタンの父ザールで、ゲーテはここでザールに替えてルスタンを登場させている。作者の思い違いというより、＜Rustan＞と＜Rodawu＞と頭韻を踏ませるためではなかったかと思われる。ルスタンはザールとロダウとの間に出来た息子で、「言葉でのイメージが燃え上がらせ、愛が煽り立て」たのはザールとロダウである。

ザールは生まれたとき「世を照らす日輪のように美しかった／顔は陽のように立派だったが／髪はすべて白かった」[6)]、それを恥じた父親サームは赤子をエルブルス山中に捨てさせた。その赤子を怪鳥スィームルグが拾い上げ自分の巣に連れて行き、雛と共に育てた。程なくして、サームは息子を捨てたことに後悔して、ザールを探しにエルブスル山にやってくる。それを知ったスィームルグは、ザールを父親のもとへ連れて行き父親に引渡す。領地に戻るとサームはザールに王位を譲った。王位に就いたザールは王国を巡ってみようと思い立ち、カーブルのメヘラーブを訪れる。ザールとメヘラーブは共に相手の人柄に心惹かれる。

ザールの部将の1人がメヘラーブには美しい娘が居ることを伝えその美しさを以下の様に語る

「その顔は陽よりも麗しく
頭から足まで象牙のようで
頬は天国、背丈はチークの木
白銀の肩に二つの漆黒の巻髪が垂れ
その先は足環のようになっている
頬は柘榴の花、唇は柘榴の実
白銀の胸に生えるは二粒の柘榴の実
両眼は花園における二本の水仙

睫毛は鳥の羽根よりさらに黒く
二つの眉はみごとな樹皮で飾られた
タラーズの弓のようで、麝香の色
月を求めるなら、まさしく彼女の顔
麝香を嗅ぐなら、まさしく彼女の髪
頭から爪先まで飾られた天国
装飾と快活と歓喜に満ちています」[7]

この言葉にザールの心は興奮し、父親のメヘラーブが非常に美男子であるのだから、娘はさぞかし美女なのだろうとその娘に思いを募らせた。一方ルーダーベの方もメヘラーブから「人の心を魅する」[8] というザールのことを聞き、彼への思いを募らせていく。このようなきっかけでザールとルーダーベは愛し合うことになる。

ユースフとズライカについて、ユースフ(ヨセフ)については、『旧約聖書』の創世記、37章以下で語られており、それが『コーラン』でも踏襲されて第12章に「ユースフ」と題されて収められている。『コーラン』第12章、23・24節から

「さて、彼が置いてもらっていた家の女(主人の妻である)が彼にさそいかけた。女は部屋の戸をぴたりと閉め、「さ、いらっしゃい」と言う。「とんでもないことを。御主人様がこんなに私によくして下さいましたのに。悪いことをする者はろくな目には逢いますまい」と彼は言った。

女も彼もすんでのところで欲情にまけるところだったが、彼が主の証拠(その時、天使ガブリエルがヨセフの父の姿をかりて現われ、彼を抑えた、という)を目のあたり見たために思いとどまった。・・・」[9]

美青年ユースフに言い寄る人妻については、『旧約聖書』で「ファラオの宮廷の役人で、侍従長のエジプト人ポティファルの妻」と、『コーラン』では「家の女」としていて名前は挙げていない。しかし、後に『コーラン』のこの記述に基づいてジャーミー(Djami, Nür al-Dïn 'Abd al-Rahman, 1414－1492)が恋愛詩を書き上げそれに『ユースフとズライハー』という題をつけた。この作品はローゼンツヴァイク(Vinzenz von Rosenzweig)の翻訳で『オリエントの宝庫』に部分的に掲載された[10]ので、これをゲーテが見ていたと思われる。

フェルハードとシーリーンについて、ペルシアのロマンス叙事詩の完成者として後の詩人たちに大きな影響を与えたとされるニザーミー(Nizämï Gandjawï, 1146?－1217?)の『ホスローとシーリーン』の中で語られていることによると以下のようである。

フェルハードはサーサーン朝期の技に優れた彫刻家で石工、シーリーンはホスロー・パルヴィーズの妻で同時にアルメニアの女王、2人は相思相愛の中であった。ところで、メス馬とメス羊から採られた乳以外には何も口にしなかった妖精のような美女シーリーンは、離れた農場から自分の館にそれを運搬することが一つの悩みになっていた。そのために、シーリーンはフェルハードを呼んで農場から館までの運河をつくることを依頼する。フェルハードはその要求を1ケ月程で実現させるのだが、この際会ったシーリーンの姿や声の美しさに心を奪われ、シーリーンを恋い慕うようになり、その思いは非常に激しくなっていった。それを知ったホスローはフェルハードを呼んでシーリーンへの思いを諦めるように命じる。しかし、フェルハードは頑として

ホスローの申し出を断る。そこでホスローはシーリーンへの敬愛の証として、一塊の巨岩よりなり、その堅硬なことは世人の語り草になっているビーストゥーンと呼ばれている、道を塞いでいる山の中央に往来できるトンネルを掘るように命じる。硬い岩山に穴を穿ち、崩れた岩石を運び出し、更に掘り続けることをただ1人でやることは不可能であると見てのことであった。フェルハードは王の申し出を受け入れ、それが完成した暁にはシーリーンへの自分の思いを認めて欲しいと申し出、仕事に取り掛かる。彼の仕事は順調に経過する。完成を恐れたホスローはシーリーンが不慮の死を遂げたという偽の報せを伝えさせる。1鑿ごとにシーリーンへの思いを込めて打ち込んでいたフェルハードは、その報せを聞いて、命が尽きて死んでしまう。彼がその悲痛な報せを聞いたとき、手に持つつるはしを山からおとし、その鋒（キッサキ）は岩に、柄は地上に落ち、しかもその土は湿っていたとか、その柄から一本の柘榴の若木が生え育ち、多くの実をつけたという。[11]

「ファルハードがシーリーンへの愛のうちに死んだとき、彼女の心は悔恨の念に苦しめられた。あの可愛い鳥が庭（彼女の心）よりとび去ってしまったから。彼女は流れのほとりの健やかな糸杉のために、春の雨雲さながらに涙を注いだものである。そして貴顕の人への弔意を表す喪服をつけ、埋葬の儀を済ませると、しみじみ寂しく思い、その墓土によってみごとな円蓋堂（ドーム）を建て、そこを巡礼の場とした。・・・・・・王は己れの仕打を悔い、みずからがファルハードに与えた苦しみにこころを悩ませた。」[12]

フェルハードのシーリーンへの愛はこのように一途のものであった。

メジュヌーンとライラーについて、この2人についてもニザーミーが取り上げてロマンス詩を作り上げている、『ライラーとマジュヌーン』である。アラビアの砂漠の有力な部族長の息子カイスは学齢期に達すると私塾に通うようになる。そこで彼は他の部族の長の娘、美女のライラーを見初め、2人は相愛の仲になる。2人の愛はますます増すが、特にカイスの恋は激しく、恋人の顔を見ないと「ライラー、ライラー」と叫びながら狂ったようにさまようので、人々は彼をマジュヌーン（狂人）と呼ぶようになる。息子のことを心配した父はライラーの父を訪れ、嫁にくれるように頼むが、彼女の父は狂人には娘をやれないと拒絶する。父からこれを聞いたマジュヌーンは砂漠をさすらい、悲しみのあまり気絶して倒れるが、羊飼いによって父の許に運ばれる。父は恋の病を治すために色々手を尽くすが、マジュヌーンのライラーに対する思いは募るばかりであった。ライラーの父は部族の名誉を汚したマジュヌーンを殺そうと企むが、その報せを聞いたマジュヌーンは砂漠に逃げる。

一方、ライラーも心ひそかにマジュヌーンを愛し続け別離を悲しむ。ある春の日、女友達と園に行き、一人離れて恋人を思っていると、たまたまそこを通りかかった気高い若者イブン・サラームが彼女を見初め、求婚する。イブン・サラームの度重なる求婚に父親はライラーを嫁にやることにする。イブン・サラームは花嫁を自分の館に連れて行くが、彼女は夫婦の契りを結ぶことを承知せず、夫も彼女の申し出を受け入れ、眺めるだけで満足する。友人からライラーの結婚を聞いたマジュヌー

ンの苦悩は増すばかりであった。彼は毎日砂漠で野獣たちを仲間に暮らす。ある日、老人に託されたライラーの手紙が届くと、彼も切々たる返事を書く。老人の計らいで2人は出逢い、マジュヌーンは恋歌を歌った後砂漠に戻る。その後ライラーの夫は亡くなり、彼女は当時の風習に従って2年間天幕にこもって喪に服した後、実家に帰るが、秋の訪れとともに身も心も弱った彼女は天国でマジュヌーンと結ばれるよう、死んだら花嫁衣裳を着せて葬るようにと母に遺言して亡くなる。彼女の死を知ったマジヌーンはその墓を詣でて嘆き、1ケ月間動物たちと墓を守りながら遂に息が絶える。部族の者は彼の死を悼んで、ライラーの傍に葬る。[13]

ハマー=プルクシュタルが翻訳したハーフィズの詩句にも次のような一節がある。

危険と苦労に満ちた
ライラーへの道では
いかなることにも増して必要なことは
お前がマジュヌーンになることだ[14]

後に、ゲーテも『日年誌』の「1815年」の項の中で果てしない愛の見本としてこの2人の名をあげている。[15]

ジェミールとボタイナーについて、ジェミールは7世紀、ウマイヤ朝アブド=ル=マリク治世下のアラブの詩人、ベドウィーンの愛の歌の作者の代表的な詩人で、ボタイナーはその恋人。[16] ボタイナーの両親はジェミールの結婚への申し出を断り、彼女を別の男性に嫁がせてしまう。ジェミールは愛を語らった地を去り、再び戻ることはなく、エジプトの地で死を迎える。しかし、彼のボタイナーへの純粋で深い愛の気持は失われることはなかった。そして、その気持を彼はその死の床につくまで感動的な詩句で表現し続けた。その詩がアラブの人々の間で好んで歌われ、広がっていった。それを知ったアブド=ル=マリクはジェミールに歌い上げられているボタイナーに1度会ってみたくなり、ボタイナーを呼びつける。ところが、色黒で、痩せたボタイナーを見て、自身詩の才能をもっていた彼は、詩の形で、ジェミールはそなたの中にどのような美的特質を見出したのだろうか、そなたのように骨ばった顔と黒い肌をしたものを一般に醜いと言っているのにと、問い掛けた。それに対して同様に優れた女流詩人であったボタイナーも即興的に答えた、地上の人々はすべての人々を支配するようにすべての人々の中からあなたさまを選んだのはあなたさまにどのような功績を認めたためだったのでしょうか、どのような汚点にも損なわれることのない輝きを持った美しく、ダイヤモンドのように強い心を持つ人のみが人々の尊敬に値するものですからと。この当意即妙な答えを受けてアブド=ル=マリクはボタイナーの機智を称え、非常な褒賞を与えたとされている。[17]

ゲーテ自身、この2人のことを『西東詩集』の他の個所でも取り上げている。
一つは「ズライカの巻」で

ズライカがどんなに醜くても
あなたは彼女を最も美しい女性にしてしまいます
そんなことを私たちはジェミールとボタイナーについて
沢山読みました[18]

「注と論考」の「最も普遍的なこと」の中で

「無数の逸話から窺えるように国民全体が機智に富んでいた。機智に富んだ言葉のために君主の怒りを呼び起こしたり、別の言葉が心を宥めたりするのである。愛情や情熱も同じ要素の中で生き活動している、それだからこそベーラムグールとディラーラムは押韻を作り出すのであり、ジェミールとボタイナーは非常に高齢に達するまで情熱的に結ばれているのである。」[19]

「花としるしのやりとり」の中で

そしてジェミールがこのようにして
ボタイナーと分かり合っていなかったら
彼らの名がこんなにも生き生きと楽しく
残されていただろうか[20]

ソロモンと褐色の女について、ソロモンはダビデの息子で紀元前10世紀のイスラエルの王、彼については『旧約聖書』の中で「ユーフラテス川からペリシテ人の地方、更にエジプトとの国境に至るまで、すべての国を支配した。国々はソロモンの在世中、貢ぎ物を納めて彼に服従した。」（列王記上5章1節）「神はソロモンに非常に豊かな知恵と洞察力と海辺の砂浜のような広い心をお授けになった。」（9節）とあるように、強力な権力と人並み外れた人間としての美点を持っていた。そして「その名は周りのすべての国々に知れ渡っていた」（10節）。そのような噂を聞き、シェバの女王があらかじめ考えていた難問をもって彼を試そうとしてやってくる。ソロモンは彼女のあらゆる質問に解答を与える。シェバの女王はソロモンの知恵と彼の立てた宮殿、かれの為すこと全てに感嘆し、金のほか多くの貴重な品々を贈呈する、ソロモンの方でも女王に王に相応しい贈りものを差出し、彼女が願うものは何でも望みのままに与えた。互いの心が通じ合った上で、女王は故国に帰って行った。

『コーラン』でもソロモンとシェバの女王が取り上げられているが、こちらでは2人を取り結んでいるのは、ソロモンに仕える鳥のヤツガシラである。ヤツガシラがシェバの女王の存在をソロモンに知らせ、ソロモンの手紙をシェバの女王に届ける。手紙のやりとりの後、女王がソロモンの元にやって来、ソロモンの偉大さに感服してソロモンに従うことになる。『旧約聖書』の場合もそうであったが、『コーラン』でもソロモンが異教徒のシェバの女王を正しい信仰に導くという形で取り上げられている。

ここでゲーテはオリエントにおける6組の恋人たちについて紹介するが、これに更にもう一つ追加して「もう一組」を次に加える。しかし、これは1819年の初版には成立が間にあわず「注と論考」の「将来のディーヴァーン」中の「愛の巻」の項の末尾に題を付さずに付け加えて発表され、1827年の決定版に載せられた。

もう一組

そうだ愛するということは大きな功績なのだ
これよりすばらしい収益を誰が見出しえようか
君は権力の大きい者にはなるまい、豊かな者にもなるまい
しかし最も偉大な英雄並になれる

人々は預言者について語るように
ヴァーミクとアスラについて語るだろう
いや語りはせぬ、名をあげるだけ
その名は皆が知っていなければならない
彼が行ったこと、為したこと
それを知る者はいない、彼らが愛し合ったこと
そのことをわれわれは知っている
ヴァーミクとアスラの名を尋ねれば、それで充分なのだ[21)]

ヴァーミクとアスラについては、ペルシア、ガズニー朝の桂冠詩人ウンスリーのロマンス詩のタイトルとなっている(『ヴァーミクとアズラー』)。このロマンスはヘレニズムを起源とするもので、イスラーム期以前にペルシアに伝えられたものとされている。ギリシアのサモス島の王の娘アズラーが神殿で美しい青年ヴァーミクと会い恋に陥るのがロマンスの発端となっている。ウンスリーの作品は断片的にしか遺されていないということであるが、この伝説的な2人の恋人はフドフド(ナイチンゲール)とバラで示される恋人のひとつの形を示していると見ることが出来る。フドフド(ナイチンゲール)の雄鳥は繁殖期になると夕方から夜更けにかけて美しい声で鳴くといわれ、オリエントにおいては恋いこがれる男性を、そしてバラはその男性を惹き付ける、花咲ける女性を示すものとされている。

ゲーテは初めヴァーミクとアスラの物語がトルコのものだと思っていたようである。1815年5月20日のディーツ宛ての手紙でこの2人に就いて教えを乞うている。[22)] しかし、その後ハマーの『ペルシア文学史(Geschichte der schönen Redekünste Persiens mit einer Blüthenlese)』によって古いペルシアの物語であることを知る。[23)]

「読本」

書物のなかで最も不可思議なものは
愛の書物だ
わたしは注意深くそれを読んだ
ごく僅かなページの喜び
苦しみは全ページに及び
別れは1断編
再会はごく小さな1章
それに断片的、悲しみの数巻は
説明で長くされ
果てしもなく、終わりもない
おお、ニザーミーよ、だがついに
御身は正しい道を見出した
解くことが出来ないもの、それを解くのは誰か
再会する恋人たちだ[24)]

1815年12月ゲーテはディーツから『アジア回想録』を贈られた。その第2巻にニシャンズィ・ムスタファ・パーシャによる「元首として、また、人間としてのバヤズェイードⅡ世とセリムⅠ世」という論文が載せられている。その最後に次のような詩があって、それがこの「読本」の下敷きになっていると思われる。

愛の術から始めて、わたしは注意深く多くの章を読んだ
苦しみの本文と別離の断章に満ちた本
それは出会いの章を縮めてしまうが、苦しみについては

説明を際限もなく長めてしまった
おお、ニシャニーよ、最後には愛の巨匠が
お前を正しい道に導いてくれた
止むことのない問いかけに対して答えは愛
する者のみに来る
(注：愛の巨匠とはここでは神を指す、どの
行も神への愛についてのみ語っている)[25]

4番目の詩には題は付されていない。

そうだ！目であったのだ、私のためにみて
くれたのは、
そうだ！くちであったのだ、私に口づけを
してくれたのは
天国の楽しみのためのように
腰はほっそり、体はとてもまるやか
彼女はいたのだろうか、彼女はどこにいっ
たのだろうか
そうだ、彼女はいたのだった、彼女がそう
したのだった
逃げながら身を捧げ
そして私の命を捕らえてしまった[26]

これと同じものが、カール・リヒター編の『ゲーテ全集』の「詩とサイン集」中の「1818年」の項に載せられていて、そこには「7月21日」と記されているので[27]、この日の制作と考えられる。『西東詩集』の校正の時期であったので、校正をしながらマリアンネのことを思いだしたのだろうか。そんなことを思わせる詩である。

5番目の詩は「注意せよ」と題されている。

注意せよ

巻き毛にも私はたまらなく嬉しい気持で
巻き込まれた
そう、ハーフィズよ、あなたと同じような
ことが
あなたの友人にも起こったようです

だが、今は彼女たちは
長い髪からおさげを編み
私たちがよく知っているように
かぶとのような編型の下で挑戦しています

しかし熟慮する者は
強要されるということはありません
重い鎖を恐れて
軽い輪のなかに逃れるのです[28]

成立は1814年の7月、「ヴィースバーデン目次表」では26番目にあって「巻き毛とおさげ」となっている。ここでの題が示すように女性の髪型を比喩的にとりあげているのである。巻き毛はナポレオン1世時代のアンピール様式の中で生まれたものだが、それに対しておさげはその後のロマン主義時代の様式の中で用いられたものであるらしい。マリアンネは巻き毛にしていたようでゲーテもそれを望ましいと思っていたようである。恋人の心を捉える巻き毛はハーフィズの中でも度々が取り上げられていて、例えば、「ライラーの巻毛の縺れの中にマジュヌーンは住む」、「心は自らそなたの巻毛の罠に陥った」、「彼女の巻毛は罠、その黒子は罠の穀粒」、「人の美は目、巻毛、頬、黒子ではなく」など。[29] また、「注と論考」の「形象的表現から比喩への移行」の中でゲーテも次のように述べている。

「われわれは絶えず巻き毛と戯れる詩人の

姿も見る

おまえの巻き毛のおのおのに
50以上の釣り針が掛かっている

は美しい巻き毛に富んだ頭に極めて好ましく向けられていて、想像力は髪の毛の先が鉤のようになっていると考えるのに何の抵抗も感じない。しかし詩人が自分は髪に吊るされているというと、われわれには適度に気に入るとは行かない。さらにサルタンについて

あなたの巻き毛のリボンの中に
敵の首が巻き込まれている

と言われると、想像力には不快なイメージを与えるか、あるいは何のイメージも与えられなくなる。」[30]

次の6番目の詩「没入」も巻き毛について語っているものである。

没入

ほんとに円い頭にいっぱいの縮れた巻き毛！
ところでこんなにもふさふさした髪の中で
手いっぱいにあちこち掻きなでることが許されたなら
私は心の底から健やかな気持ちになれる
そして額に、眉に、目に、口にくちづけをする
その後で私は新鮮なきもちになり、同時に心の痛みを感じる
この5本の歯の櫛、それはどこで止まったらよいのやら
それはもう再び巻き毛のところに戻ってしまう
耳も戯れを拒みはしない
ここは肉でもなく、皮膚でもない
戯れにはとても感じやすく、愛情豊かだ
しかし頭の上を掻きなでていると
そのように豊かな髪の中で
いつまでも指を行ったり来たりさせたくなる
ハーフィズよ、あなたもこのようにしたのでした
わたしたちもそれを改めて始めるのです[31]

「ヴィースバーデン目次表」では27番目にあって「巻き毛」となっている。制作日は1814年5月19日で、『西東詩集』の中では一番早いものである。[32] 巻き毛は恋人の持つ特徴のうち中心的なもので、恋人の象徴でもある。巻き毛には香料もかけられていて、巻き毛が放つ愛する女性特有の芳しい香りも恋する男の心を魅了する。ハーフィズの詩句には次のような表現も見られる。

「そなたの巻毛のヒヤヒンスの香りに狂った
そなたの巻毛に焦れ生命が果てたとて何だ」[33]

ガザルという詩形では普通結びの対句に詩人の雅号を詠み込むことになっていて、ハーフィズの場合もそれが行われているが、この詩でもそれが取り入れられていて最後の詩句の中でハーフィズによびかれる形がとられている。

7番目の詩「気遣わしい」

気遣わしい

あなたの指をかわいらしく見せている
エメラルドのことについて話せというのですか
時には言葉は必要ですが
黙っていた方が良いことが度々あるのです

それでは言いましょう。その色は
緑で目に活力を与えると
だが、言いますまい、痛みと傷跡が
すぐ後に気づかわれるとは

ともかくあなたはそれを読むことになりましょう
なぜそのような力をはたらかせるのですか
「エメラルドが爽やかな気分にさせてくれるように
あなたの本性は危険なのです」[34)]

1815年9月30日ゲーテはマンハイムに前のオランダ大使シュトリック宅を訪ね、食事を共にし、快適な夕べを過ごし15歳になるその家の娘ベティにこの詩を贈っている。[35)]「あなた」と呼びかけられているのはベティ・シュトリックのことと想像される。指輪の中の飾り石にはエメラルドが使われている。宝石に対する喜びは、例えば「歌人の巻」の「祝福を担うもの」の中に次のような1節でも語られている。

紅玉髄に刻まれた魔よけのことば
それは信仰深い人に幸せと繁栄をもたらす
それが縞瑪瑙の地に刻まれていたら
清らかな口でそれにキスをするがよい
すべての災いを追い払ってくれ
きみと場所を守ってくれる
もし刻まれたことばが
アラーの名を純粋に告げていたら
きみを愛と行為に燃え立たせてくれよう
特に女性たちは
魔よけに教化される[36)]

また、エメラルドの緑色は力づけ、回復させる作用を目に及ぼす。緑が生命に活力を与えるということは、「歌人の巻」の「万象のいのち」に次のような表現も見られ

「雷雨よ、私を治癒してくれ
青草のにおいがするのを嗅がせてくれ」

「この地のいたるところ
緑色になり、青葉の香りがする」[37)]

また、「ヘジラ」の中では「ハディルの泉がお前を若返らせて欲しい」とあるが、この「ハディル」は井筒俊彦訳『コーラン』では、「この不思議な人物はその名をアル・ハディルal-Khadir即ち「緑色の男」と言い、古アラビアのフォーク・ロア文学の立役者」[38)]と注記されている。これも「緑」と関わりがある。

8番目の詩には題は付されていない。

可愛いひとよ、ああ、清らかな天国で
陽気に飛び交っていた
自由な歌がこわばった書巻の中に
押し込まれてしまっています
時はすべてのものに破滅をもたらします
歌だけが残っていくのです

その1行1行が愛のように
不滅で永遠であって欲しいものです[39]

これと同じ詩が「詩とサイン集」中の「1819年」の項にあって、そこでは左下に「1815」、右下に「1819」と記されている。[40] また、ゲーテの1819年11月11日の日記に「ディーヴァンを含めた小包を顧問官フォン・ヴィレマー宛てに」[41] とあるので、この頃マリアンネに宛てて制作されたものであろう。「可愛いひとよ」と呼びかけられているのはマリアンネである。1827年版に収められて発表された。人間的な状況は時と共に滅びていくが、詩歌は不滅である。

9番目の詩「空しい慰め」はヴァイマルからヴィースバーデンへの途中で制作された。「詩とサイン集」中の「1815年」の項に題が付されない形で取り上げられていて、下に「アイゼナハ.1815年5月24日」とある。[42] 「ヴィースバーデン目次表」では61番目にいれてあり、ここでは「夜の幽霊」となっている。

空しい慰め

真夜中私はしゃくりながら泣いた
あなたがいないのに耐えなければならなかったので
そこに夜の幽霊がやって来た
それで私はきまりが悪くなった
私は言った「夜の幽霊たちよ
いつもは眠っている私の脇を通り過ぎるのに
きみたちはしゃくり泣いている
私を見つけてしまった
大きな財産を亡くして困っているのだ
普段は賢いと思っているこの私のことを
一段とやりきれないとは思わないでくれ
大きな災いに見舞われたのだ」
すると夜の幽霊たちは
がっかりした顔つきで
私が賢いのか愚かなのかなど
全く関心がないという風に
通り過ぎて行った[43]

別離と苦しみの夜が詩人に夜の幽霊を思い起させるということはハーフィズの場合にも見られて、次の句が関連づけられる。

昨夜私の目から流れ出た
血の涙のせいで
私は夜の幽霊の前で
恥をかく羽目になった[44]

別れの夜きみは影を長く伸ばす
夜の幽霊たちよ、きみたちは何をしようとするのか[45]

「ズライカの巻」の「残響」という詩の次の句にもこれに通じるものがある。

だが詩人が暗い夜をしのび歩くとき、
彼は悲しげな顔を隠す[46]

10番目の詩「控えめに」

控えめに

「あの娘が愛情からきみのものとなっている
なんて思い込むのは、なんと思い違いをし

ていることか
私ならそんなことを喜びはしまい
彼女はおべっかを心得ているだけなのだ」

詩人

私はそれで満足なのです
そう口実をしておきましょう
愛は自由な贈りものなのです
へつらいは敬意のしるしです[47]

成立はヴァイツによると1815年の5月末か6月の初め。[48] 草稿では、第2節の前の「詩人」は「ハーテム」になっていた[49] ところから、詩人が自分を「ハーテム」と名乗った「ズライカの巻の3番目の詩（「今やあなたがズライカと名のったのだから」）の成立（1815年5月24日）の後と考えられる。愛はこころからの贈りものであるのだから、たとえ媚びにみえようが、そんなことは気にしないということか。

11番目の詩

あいさつ

おお、何と私は幸福であったことか
フドフドが道の上を飛ぶ
大地をゆっくりと歩いた
私は岩の中で
昔の海の化石化した貝を探した
フドフドが冠羽を広げながら
やって来た
この生あるものは
死んだものをからかいながら
おどけた様子で
これ見よがしに歩いてきた
私は言った、フドフドよ確かに
おまえは素晴らしい鳥だ
どうか急いでくれ、ヤツガシラよ
愛する人のもとに急いでくれ
私が何時までもあの人のものだ
と告げるために
おまえはかつて
ソロモンとシバの女王の間の
とりもち役をしたではないか[50]

1815年5月27日フランクフルトでの制作である。この年ゲーテは5月24日ヴァイマルを出立し、25日にフルダに、そして26日にはフランクフルトに着いている。この旅のはじめの頃にフランクフルトに住む恋人マリアンネをズライカとペルシア風に呼び、自分をハーテムと名乗って、詩によってオリエントの世界を創造しようと気負い立ったばかりであった。今まさに恋人のもとに近づこうとしていた詩人にとっては、かつてソロモン王とシバの女王との間を取り持ったといわれるヤツガシラの出現はなんともおあつらい向きであった。この詩でゲーテはヤツガシラをフドフド（Hudhud）とアラビア語を用いて表現している。ヤツガシラは「フウップ、ウップ、フウップ」と甘く単調なさえずりをするという、そんなところから英語ではhoopoe、フランス語ではhuppe、ドイツ語Hopf（Wiedehopf）といった名が付けられるようになったのであろう。ペルシア語でもhodhodである。

12番目の詩

あきらめ

「あなたは衰えてゆきながら、こんなにも優しく
やつれながらこなにも素晴らしくうたうのですか」

詩人

恋は私を冷たく扱います
ですから私は進んで打ち明けます
私はつらい気持で歌うのです
あのロウソクを御覧なさい
ロウソクは無くなりながら輝いているのです[51)]

1815年5月27日に制作され、「同情」という題で『1817年の婦人のための小型本』に発表された。「ヴィースバーデン目次表」の80番目にいれられている。

ここでのロウソクの描写にはハーフィズの詩が手掛かりとなっているものと思われる。

『ハーフィズ詩集』の「ターの章」の68番目の詩から

友よ、あわれなハーフィズの状態を
尋ねよ
絶えず溶けながら燃えているロウソクを[52)]

「ダールの章」の67番目の詩から

ロウソクのように
私はただ自ら衰えてゆくだけ[53)]

「サーの章」の2番目の詩から

友の存在が
おまえを明るくしてくれていることへの感謝の念から
ロウソクのように悲しみに燃え
そして満足せよ

この部分にはハマー＝プルクシュタルが次のように注をつけている。

「ロウソクから笑いそして同時に泣くことを学べ、なぜならロウソクは炎を通して明るい輝きで笑うが、同時にあつい涙を流して溶けるのだから」[54)]

「ヌーンの章」の3番目の詩から

ロウソクのように私は微笑みながら自らを泣く

この部分にもハマー＝プルクシュタルの注記がつぎのようにある。

「燃えているロウソクは誠実な恋人の象徴である。彼はロウソクの溶ける蝋の滴のようにあつい涙を流しながら衰えてゆく。そしてその際明るいロウソクの輝きのような楽しげな顔をする。ロウソクは燃えながら炎をゆらゆらさせ笑う、また溶けて無くなりながら泣く、そのように詩人の魂も明るい烈火の中で笑いながら燃え立ち、あつい涙に溶けながら泣く。」[55)]

13番目の詩には題が付されていない。これは前の「あきらめ」とまとめられて編集されている版もある。

恋の痛みはまったく荒れた寂しい
場所を探したが
私のすさんだこころを見つけ出し

そのうつろな心に巣篭もった[56]

1827年の決定版の中に加えられたもの。『ハーフィズ詩集』の「ラームの章」の最初の詩の次の詩句が手掛かりになっていたと見られる。

おまえの苦痛はおまえの荒れたこころのほかに
見出すところはどこにもなかった
それで苦痛は
その狭い心の中に巣篭もった[57]

14番目の詩「さけられず」

さけられず

野にじっとしておれと
誰が鳥に命じることができようか
毛を刈られる羊に
誰がもがくことを禁じるだろうか

私の髪の毛が縮れるので
私が粗暴になるというのだろうか
そうではない、私をかきむしる刈り手が
私に粗暴さを強いるのだ
私が雲に
あの人にどんなに私が思いを寄せているかを
打ち明けるために思う存分天に向かって
歌うのを誰が止めさせようとするだろう[58]

1814年8月31日の制作、「ヴィースバーデン目次表」では「拒むことの出来ないこと(Unverwehrtes)」と題されて68番目に入れられている。『1817年の婦人のための小型本』では「いらだち（Ungeduld)」と題された。この詩にもハーフィズの詩の中に手掛かりとなったものがある。「シーンの章」の22番目の詩の中から

鳥たちに向かって誰が
野にじっとしておれと命じることができようか
あなたの訪れを待ちこがれているとき
いったい忍耐などどこにあるだろうか[59]

15番目の詩「ひめごと（Geheimes)」、この詩も前の詩と同じ日に制作された。「ヴィースバーデン目次表」では「愛するひと(Liebchen)」と題されて69番目に入っている。

ひめごと

私の恋人の目配せに
誰もがびっくりして立ち止まる
だがすべてが分っている私は
それが何を意味するかをとてもよく知っている

その目は、私が愛しているのはこのお方
他の誰でもありません、と言っているのだ
ですから、あなた方気のいい方々
不思議がったり、憧れたりするのはおやめなさい

実に激しい力を込めて
彼女はあたりを眺め回すけれど
彼女はただ恋人に

次の逢引の時を知らせようとしているだけなのだ[60)]

この詩の最初の2行の原文は

Über meines Liebchen Äugeln
Stehn verwundert alle Leute,

となっているが、これは『ハーフィズ詩集』の「ダールの章」の110番目のものの最初の2行と殆ど同じである。ハマー＝プルクシュタル訳ではこうなっている。

Ueber meines Liebchens Aeugeln
Staunen alle Unerfahrne[61)]

16番目の詩「最も内密なこと」

最も内密なこと

「われら逸話を追い求める者たちは
きみの恋人が誰で
ライバルが沢山居るのではないかということを
探ることに熱中しています

なぜならきみが夢中になっているということをわれらには分ります
そのことは認めることと致しましょう
しかし、相手の方がきみをそれ程愛しているとは
われらには信じられないのです」

親愛なる方々、どうぞご自由に
探してください、ただこれだけはお聞きなさい
彼女が目の前に現われれば、きみたちは驚くことになります
彼女が立ち去ってしまうと、きみたちはその面影に恋焦がれることになります

シェハブ・エディンがアラファト山でマントを脱いだのを
きみたちは知っているだろうか
自分の意識の中で行動する人を
きみたちは愚かということはできない

もし皇帝の玉座の前で
あるいは非常に愛する人の前で
きみの名が語られることがあったら
それをきみの最高の報いとしたまえ

それ故、かつてメジュヌーンが死に瀕したとき
ライラーの前で自分の名をあげないで欲しいと
願ったことは
この上もなく悲惨なことであった[62)]

「ヴィースバーデン目次表」では70番目におさめられていて「明らかな秘密（Offenbar Geheimniß)」と題されていた。また「詩とサイン集」には題を付されずに「1815年前半」の項におさめられているので、その頃の作と見られる。

シェハブ・エディン（Shihab al-Din Abu Hafs Umar al-Suhrawardi, 1145－1234）はスンニー派の指導者。1231年の金曜日に最後のメッカ巡礼の際にアラファト山への巡礼も行ったが、そこでも大勢の人が居てしか

も人々は彼の仕草を真似て礼拝していた。日々心から神を愛している自分を神は大勢の人々の中から見出してはくれまいと思っていると、聖殿からシャイフ（長老）が出てきて「おまえの心に喜ばしいことがある。感謝のしるしに衣服を脱いで中に入れ、お前はまだ至らぬものだが、神のもとでおまえについてのお尋ねがあった」と告げた。彼は喜びのあまり大声で叫び、衣服を脱いで聖殿に入ったということが故事として伝えられている。[63)]

この詩はオーストリアの皇后マリア・ルドヴィカ（1787－1816）を思ってのものでもある。この詩は隠されたやり方でゲーテのマリア・ルドヴィカに対する崇拝の気持を述べたものでもある。1810年ゲーテはカールスバートに湯治に行くが、そこでマリア・ルドヴィカと個人的に知り合う。そしてその2年後の1812年にも湯治場のテプリッツで親しく交流する機会を持った。その時のことについてゲーテは友人のラインハルト（Karl Friedrich von Reinhartd, 1762－1837）に自分が値する以上の幸せと善意を皇后から受け、皇后と会えたことが彼の心にどんなに深い印象を与えたかを手紙で伝えている。その手紙で次のようなことも述べている。

「この4週間という期間の間に私がこの並はずれた貴婦人について完全に作り上げた思いは全生涯に渡っての豊かな恵みであります。生涯の終わりにこのような出会いを持てたということは、あたかも日の出の際に死をむかえるかのような、そして自然は永遠に創造的であり、その内奥までも神々しく、生き生きとしていて、形に忠実で、老化することはないという心地よい感じを与えてくれます。」[64)]。

ところがこの手紙はラインハルトの手からその友人であったハマー＝プルクシュタルに渡り、それがマリア・ルドヴィカの目にも触れてしまうことになる。彼女はヨゼフィーン・オドネル夫人を通してゲーテに彼の作品の中で自分のことについてはどのような口実であれ、暗示的にも触れないで欲しいということを伝えた。「最も内密なこと」という題をつけてもゲーテはその約束を守らなかった。もっとも、この作品は1819年に出版されたのであるが、その時にはすでにマリア・ルドヴィアは鬼籍に入っていた。

『西東詩集』の成立の契機となったのは、ゲーテがライン・マイン・ネッカル地方への旅に出る少し前に出版社主コッタからハマー＝プルクシュタル訳になる『ハーフィズ詩集』を贈られたことであった。この『ハーフィズ詩集』を彼は携行し、それを読みながら、またハーフィズと競い合おうとしながら詩作を進めていった。従って初めは「詩」や「詩人」というものが中心的なテーマであった。この旅の途上ヴィースバーデンでゲーテは1814年の夏マリアンネを伴ったヴィレマーの訪問を受ける、彼がマリアンネに会った最初である。その後ゲーテはゲルバーミューレにあるヴィレマーの別荘を訪れ客人となる。その時にはマリアンネはヴィレマーの妻になっていた。幼い頃劇団の子役として活躍していたマリアンネは大詩人ゲーテに強い関心をもっていたし、ゲーテもマリアンネに心を惹かれるようになっていく。「愛」をテーマとした詩が作られ出してくる。こうして愛のテーマの詩が膨れ上がり、それがやがて『西東詩集』の中でオリエント風に装われた中で、ハーテ

ムとズライカの愛としてこの詩集の重要なテーマとなってゆくことになり、「愛の巻」は「ズライカの巻」とともにこの詩集の中心的な存在となってくる。

注

1) Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchner Ausgabe, hrsg. von Karl Richter (以下M.A.とする). Bd.11.1. 2. S.30.
2) Mohammed Schemsed-din Hafis, Der Diwan, Aus dem Persischen zum ersenmal ganz übersetzt von Joseph von Hammer-Purgstall, 1973, Georg Olms Verlag, Hildesheim・New York, (以下Hafis, Diwanとする) Bd. I. S.152.
3) MA, Bd.11.1. 2. S.30.
4) 黒柳恒男訳フィルドゥスィー『王書』では、ロスタム。
5) 黒柳恒男訳フィルドゥスィー『王書』では、ルーダーベ。
6) 黒柳恒男訳フィルドゥスィー『王書』東洋文庫150、3ページ。
7) 同上、14ページ。
8) 同上、17ページ。
9) 井筒俊彦訳『コーラン』岩波文庫、中、31ページ。
10) Fundgruben des Orients bearbeitet durch eine Gesellschaft von Liebhabern, Bd.2, S.47f., S.313ff., Bd.3, S.290ff. 等。
11) 岡田恵美子訳ニザーミー『ホスローとシーリーン』東洋文庫310、155－191ページ。ここでは「フェルハード」は「ファルハード」となっている。
12) 同上、192ページ。
13) 黒柳恒男著『ペルシアの詩人たち』、オリエント選書2、179－180ページ。
14) Hafis, Diwan, Bd. II. S.357.
15) M.A..Bd.14. S.239.
16) ジャミールは《The Encyclopaedia of Islam, New Edition, Leiden, 1960－2004, vol. II, p.427.》では、Djamïl a. 'Abd Alläh b.Ma'amar al-'Udhrï、ボタイナーはBathnaまたはButhayna、《Geschichte der arabischen Litteratur von Carl Brockelmann》Bd. I. S.44, Supplementband I, S.78f.ではジャミールはGamïl b. 'Al. al-'Udri、ボタイナーはButainaとなっている。
17) Goethe West-östlicher Divan Gesamtausgabe Besorgt von Hans-J. Weitz, Frankfurt am Main, 1972, (以下Weitzとする). S.493.
18) M.A.,Bd.11.1. 2. S.78.
19) Ibid. S.171.
20) Ibid. S.199.
21) Ibid. S.30f.
22) Goethes Werke. Hg. Im Auftrage der Großherzzogin Sophie von Sachsen. Weimar 1887－1919. (以下WA.とする), IV. Abt. S.340.
23) Geschichte der schönen Redekünste Persiens mit einer Blüthenlese von Joseph von Hammer, Wien,1818. S.46.
24) M.A.,Bd.11.1. 2. S.31.
25) Denkwürdigkeiten von Asien in Künsten und Wissenschaften Sitten, Gebräuchen und Alterthümern, Religion und Regierungsverfassung, aus Handschriften und eigenen Erfahrungen gesammelt von Heinrich Friedrich von Diez. Teil2: Berlin und Halle. 1815. S.371.
26) M.A.,Bd.11.1.2. S.31.
27) M.A.,Bd.11.1.1. S206.
28) M.A.,Bd.11.1.2. S.32.
29) 黒柳恒男訳『ハーフィズ詩集』41ページ、44ページ、49ページ、52ページ。
30) M.A.,Bd.11.1.2. S.186f.
31) Ibid. S.32.
32) 黒柳恒男訳『ハーフィズ詩集』310ページ
33) 例えば、Weitz.. S.461.
34) M.A.,Bd.11.1.2. S.33.
35) WA. III. Abt. Bd.5. S.184.
36) M.A.,Bd.11.1.2. S.10.
37) Ibid. S.20.
38) 井筒俊彦訳『コーラン』岩波文庫、中、121ページ。
39) M.A.,Bd.11.1.2. S.33.
40) M.A.,Bd.11.1.1. S.225.
41) WA. III. Abt. Bd.7. S.111.

42) M.A.,Bd.11.1.1. S.101f.
43) M.A.,Bd.11.1.2. S.33f.
44) Hafis, Diwan, Bd.2, S.132.
45) Ibid. S.138.
46) M.A.,Bd.11.1.2. S.87.
47) Ibid. S.34.
48) Weitz, S.464.
49) Goethe West-östlicher Divan, Kritische Ausgabe der Gedichte mit textgeschichtlichem Kommentar von Hans Albert Maier, Kommentar, Tübingen 1965. S.152.
50) M.A.,Bd.11.1.2. S.34f.
51) Ibid. S.35.
52) Hafis, Diwan.Bd. I . S.148.
53) Ibid. S.423.
54) Ibid. Bd. II . S.31.
55) Ibid. S.280.
56) M.A.,Bd.11.1.2. S.35.
57) Hafis, Diwan.Bd. II . S.131.
58) M.A.,Bd.11.1.2. S.35f.
59) Hafis, Diwan.Bd. II . S.87.
60) M.A.,Bd.11.1.2. S.36.
61) Hafis, Diwan.Bd. I . S.368.
62) M.A.,Bd.11.1.2. S.36f.
63) Weitz, S.544.
64) M.A.,Bd.11.1.2. S.515.